

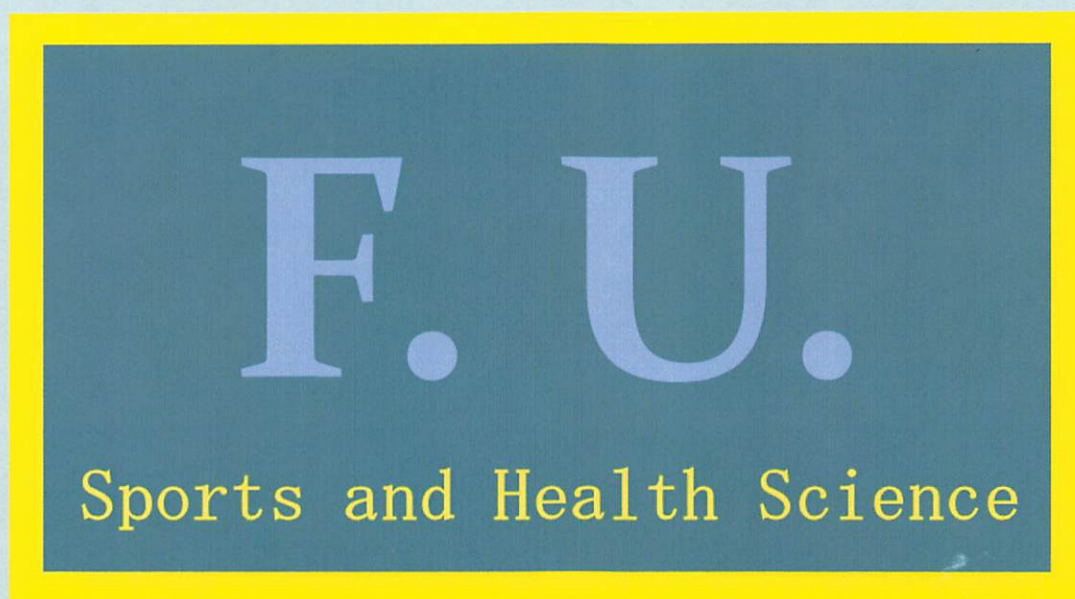
福 岡 大 学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年 報

平成 28 年度 (2016)



福岡大学スポーツ科学部

第 2 号

# 福岡大学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

## 年報

平成28年度（2016）

福岡大学スポーツ科学部

第2号

## 目次

挨拶	1
活動内容	
1 学部および研究科の三つのポリシー	
(1) スポーツ科学部	3
(2) スポーツ健康科学研究科	5
2 2016年度 活動年譜	7
3 教員組織および担当者	9
4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義	
(1) スポーツ科学部	12
(2) スポーツ健康科学研究科	16
5 教育活動	
(1) 入学前教育	17
(2) 新入生懇談会	17
(3) クラス面談・修学指導	19
(4) フレッシュマンセミナー授業方法	21
(5) ステップアップセミナー授業方法	22
6 FD・SD活動	
(1) シラバス点検	24
(2) 学外研修参加	24
(3) ワークショップ	25
(4) 授業アンケート	25
7 地域連携、社会貢献、広報推進	30
8 国際交流、高大連携	32
9 教職課程教育	34
10 研究科教育活動状況	36
11 就職・進路	
(1) スポーツ科学部	37
(2) スポーツ健康科学研究科	38
12 外部獲得資金実績	39
13 関連資料一覧	40

## 学部・研究科の魅力づくり

スポーツ学部長 田中 守

スポーツ健康科学研究科長 青柳 領

スポーツ科学部とスポーツ健康科学研究科では、2015年度版から学部と研究科の年間活動を総括し、記録に残すとともに学内外にその成果を公表する目的で、昨年（2016年）秋「スポーツ科学部・スポーツ健康科学研究科年報」を創刊しました。今年作成する年報は、2016年度版（第2号）になります。学部・研究科教員の研究活動（研究業績）と社会活動、競技・指導活動は「スポーツ科学研究（大学研究紀要）」に、また現在学部として取り組んでいる教育プログラムの「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」と「ココロとカラダのウエルネスプログラム」は別冊あるいはスポーツ科学部ホームページ上の電子ファイルとして詳細を掲載していますので、本年報（第2号）はこれら以外の内容になります。具体的には、目次をご覧ください。

スポーツ科学部は、1946年（昭和44年）体育学部体育学科として学生定員100名で創設されました。その後、学生定員増（臨時定員増を含め）を何度か経て現在の学生定員280名となっています。1998年（平成10年）スポーツ科学部への名称変更とともにスポーツ科学科と健康運動科学科の2学科へ改組転換し現在に至っています。2017年（平成29年）3月291名の卒業生を加えて総数10,789名を輩出しています。

スポーツ健康科学研究科は、1990年（平成2年）体育学研究科体育学専攻修士課程として6専修部門（体育学、体力学、スポーツ医学、体育科教育学、コーチ学、健康運動学）を創設しました。2003年（平成15年）にスポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻に改称し、現在6部門13専修となっています。また、2004年（平成16年）にはスポーツ健康科学専攻博士課程を2部門（健康運動科学、スポーツトレーニング科学）増設しました。2017年（平成29年）3月8名の修了生を加えて総数404名の修了生（修士課程374名、満期退学者を含む博士課程30名）、13名の課程博士と2名の論文博士を輩出しています。

2013年（平成25年）12月から学部役職員の変更に伴う新体制がスタートし、“学部の魅力づくり”をテーマに、“FUSS アクティブプラン（福岡大学スポーツ科学部推進計画）”の名称で取り組んでいます。スポーツ・健康運動に関する分野において社会を先導する高い専門性と気概を持った人材の育成（教育面）に加えて、これを実現できる教育環境づくり（教育組織、FD・SD）、並びに教育や社会に資する研究環境の整備（研究面）を推進し、さらに近未来に向かって学部が独自に取り組む特別プロジェクトを推進し、もって“学部の魅力づくり”を目標としています。

2016年度（平成28年度）の取り組みとして、まずは上半期に年報創刊号の作成に取り組み10月に発行できたこと、併行して本学部の全教員が執筆者となって1年間取り組んできた、福岡大学全学生のための「保健体育科目」の教科書「大学生のスポーツと健康生活」（大修館書店）を発

刊できたことが、特筆すべき成果と言えます。また、全学的なキャンパス整備検討委員会において1年間かけて議論してきた結果、本学部の意向が大きく反映された日本水泳連盟公認プールの移設（建設）が決定（2017年5月理事会）しました。その他、大学からの支援を受けて実施している「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」や「ココロカラダのウェルネスプログラム」、学部ホームページの充実、教員現役合格率・健康運動指導士合格率アッププロジェクトや国際スポーツ人材育成派遣プロジェクトなど、継続的な教育活動、地域・社会貢献活動、国際交流活動、高大連携活動、就職・進路支援活動等を行いました。釜山大学との大学院国際学術交流も2016年度で5回目になりました。

一方、人事に関して、空席だった保健体育科教育学に今村律子准教授が4月から採用され、新助教1名、新助手2名も採用されました。また、柿本真弓准教授、築山泰典准教授、森口哲史准教授が4月に教授に昇格されました。さらに、吉武行寛事務室長の発案により商学部二部学生のワークスタディを活用して2名の学生を採用しその指導を含めて採用した久木元俊信氏の貢献は大きく、実技授業中の貴重品管理により盗難がゼロになったことは素晴らしい成果となりました。2017年3月に退職された瀧田伸吾教授（剣道）と向野義人教授（スポーツ内科学、東洋医学）には永年のご功績が評価され名誉教授の称号が授与され、また9年間に亘り保健体育科教育法の特任教授であった深江久嗣特任教授も2017年3月に退職されました。本学部・研究科へ多大なご貢献をいただきました3名の先生方に書面をお借りし感謝申し上げます。

本学では、1996年（平成8年）から大学基準協会の「大学評価マニュアル」に基づき、自己点検・評価を開始しました。その後、自己点検・評価の実施と結果公表の義務化に伴い2000年度（平成12年度）に第2回目の自己点検・評価を行いました。2004年（平成16年）からは第三者機関（認証評価機関）による認証評価を7年に1回受けることが義務付けられ、本学では2007年度（平成19年度）に第3回目、2014年度（平成26年度）に第4回目の自己点検・評価を行い、翌年“大学基準協会に適合”との認証評価を受けました。2015年度（平成27年度）からは毎年自己点検・評価を行うことになり、本年報が学部基礎データ調書資料としても活用できています。

# 1 学部および研究科の三つのポリシー

## (1) スポーツ科学部 三つのポリシー

### ❖ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

スポーツ科学部は人材養成の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツや身体運動を対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般にかかわる職種を目指そうとする人

の入学を求めています。

### ❖ カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

スポーツ科学部はスポーツ・運動を科学し、実践することができる能力を身につけるため、カリキュラムは教養科目と並列に専門的基礎科目を1年次より配置し、学生個々の興味と関心に基づいて専門分野が選択できるように必修科目を極力少なくし、選択科目を多く配置します。実技実習科目は、自ら専門とする種目のコーチング理論を深めるために演習形式の授業形態をとります。健康運動に関わる科目は、現場の実践に即した科学的指導やプログラム開発ができるように学外の実習を配置します。

スポーツ科学科は、競技スポーツおよびスポーツ全般にわたる専門性を高めることをねらいとし、健康運動科学科は、運動による健康を通して国民のクオリティオブライフ向上に貢献することをねらいとして、それぞれの学科の特性にあったカリキュラム編成とします。

### ❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

スポーツ科学部はスポーツ・運動を科学的知識に基づいて実践・指導ができることを特に重視し、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に学位を授与します。

1. スポーツや運動全般の科学的指導能力
2. 専門とするスポーツ・運動の高い技術習得と指導能力
3. スポーツ・運動に関する医科学的知識と研究方法の習得及び卒業論文作成能力
4. スポーツ・運動を通して得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション、課題解決、倫理的行動能力

## ■ **スポーツ科学科**

<人材養成および教育研究上の目的>

スポーツ科学科は、スポーツ競技力や運動能力の向上を目指したスポーツの医科学的知識を有し、スポーツ界・教育界・産業界・官界等において、スポーツ医科学の知識に基づいた適切なスポーツの実践と理論的指導ができる人材養成を中心に、科学的トレーニング法のみならず施設や用具等の開発、スポーツイベント等の企画・運営を含めたスポーツマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

## スポーツ科学科 三つのポリシー

### ❖ アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

スポーツ科学科はスポーツに関わる人材養成・教育研究上の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツを対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、トレーナー等スポーツに関わる職種を目指そうとする人
5. プロ・企業スポーツにおいてトップアスリートおよびその指導者、警察官、消防士などの公務員、企業全般の職種を目指そうとする人の入学を求めています。

### ❖ カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

スポーツ科学科はスポーツを科学し、実践する能力を身につけるため、カリキュラムは共通教育科目と並列に専門基礎科目を1年次より配置し、学生個々の興味と関心に基づいて専門分野が選択できるように必修科目を極力少なくし、選択科目を多く配置しています。実技実習科目は、自ら専門とする種目のコーチング理論を深めるために演習形式の授業形態をとっています。また、意図的、計画的に専門教育を進めるために、一部選抜制を含むコースを設定して、カリキュラムの中にアスリート・コーチコース推奨科目群、トレーナーコース推奨科目群、保健体育教員コース推奨科目群、生涯スポーツ教育コース推奨科目群、コース共通科目群を設け、将来を見据えた専門的知識や技能を高め、社会の進歩や変革に応え得る深い学識を有する人材を育成します。

### ❖ ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

スポーツ科学科は、スポーツの科学的知識に基づいて実践・指導ができることを特に重視し、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に学位を授与します。

1. スポーツ・運動全般の医科学的知識を有し、自ら発見した新たな課題を解決する力
2. 専門とするスポーツの高い技術習得と指導する力
3. スポーツを通して得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、倫理的思考力を有し、社会の一員として社会の発展に寄与できる力

## ■ 健康運動科学科

<人材養成および教育研究上の目的>

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動に関し、心身の健康の回復、保持、増進を目指した医科学的知識を有し、地域社会・教育界・産業界・医療分野等において、創造的・実践的な指導を行うことができる人材養成を中心に、企業や地域・医療とも連携した健康づくりマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

## 健康運動科学科三つのポリシー

### ❖アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動に関する人材養成・教育研究上の目的を達成するために、

1. 健康運動やレクリエーション活動を日常的に実践している人
2. 健康運動やレクリエーション活動を対象に、積極的に科学しようとする人
3. 体育教員、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般に関わる職種を目指そうとする人
4. 地域社会、産業界、医療分野等でスポーツや体育、レクリエーション活動の指導者を目指す人の入学を求めています。

### ❖カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動を科学し、実践・指導することができる能力を身につけるため、カリキュラムは共通教育科目と並列に専門的基礎科目を1年次より配置し、学生個々の興味と関心に基づいて専門分野が選択できるように必修科目を極力少なくし、選択科目を多く配置しています。健康運動に関わる科目は、現場の実践に即した科学的指導やプログラム開発ができるように学外の実習を配置しています。また、意図的、計画的に専門教育を進めるために、一部選抜制を含むコースを設定して、カリキュラムの中に健康運動指導者コース推奨科目群、保健体育教員コース推奨科目群、生涯スポーツ教育科目群、コース共通科目群を設け、将来を見据えた専門的知識や技能を高め、社会の進歩や変革に応え得る深い学識を有する人材を育成します。

### ❖ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

健康運動科学科は健康運動やレクリエーション活動を科学的知識に基づいて実践・指導ができることを特に重視し、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に学位を授与します。

1. 健康運動やレクリエーション活動の医科学的知識を有し、自ら発見した新たな課題を解決する力
2. 専門とする健康運動やレクリエーション活動の高い技術習得と指導する力
3. 健康運動やレクリエーション活動を通して得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、倫理的思考力を有し、社会の一員として社会の発展に寄与できる力

## (2) スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（博士課程前期・後期）

<人材養成および教育研究上の目的>

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、運動、スポーツ、レクリエーション、レジャー、体育、健康、福祉等を対象とする学問の深化を図り、新しい世紀のウェルネス社会実現に向けて貢献し、高度なスポーツ知を拓く研究科として機能することを教育理念とする。博士課程前期では、競技スポーツ・学校体育・地域スポーツ・医療等の指導現場において高度な知識と技術を基に、体育・スポーツ・健康・レクリエーションに関する科学的指導を実践・応用できる専門家の養成を行う。博士課程後期では、健康増進や疾病・障害の治療・予防・再発防止を目的とした運動プログラムの開発・実践に関する研究や、幼少期から高齢期に至るライフステージに応じたスポーツパフォーマンスの向上を目的とした研究などの専門的な領域について自立して研究



活動を行い得る研究者を養成する。

## スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻三つのポリシー

### ◆アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

本研究科は、博士課程前期では、指導現場において科学的指導を実践・応用できる人材を育成するという観点から、

1. スポーツや運動を科学的観点から研究することに興味のある人
2. 競技スポーツにおいてパフォーマンスを向上させる科学的方法に興味のある人
3. 教育の現場でより高度な科学的成果を取り入れようとしている人
4. 医療現場で運動により健康の維持や疾病の予防しようとする人

の入学を求めている。また、博士課程後期では、高等教育機関あるいは研究機関において独立して研究できる人材を育成するという観点から、

1. 基礎的な学力を有し、創造的で柔軟な発想を持ち、研究を遂行することができる人
2. 博士課程前期では十分な研究成果を得られず、研究を継続することを望む人
3. 医療や健康増進に強い熱意がある人
4. 広く自分の研究成果を国外にも発信したい人
5. スポーツ・体育分野の出身者以外にもスポーツや健康を科学的に研究することに興味のある人の入学を求めている。

そのため、体育、体育・スポーツ科学関連学部の卒業生のみならず、広範囲からの領域の学生の受け入れを目指している。特に、社会人や外国人は積極的に受け入れる。

### ◆カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

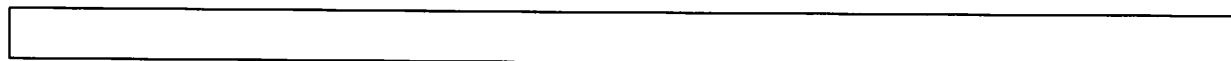
博士課程前期では、各自の専門性を高めるために、各部門ごとに「特別研究」と「特講」などの専修科目を設置し、同時に、関連する領域の知識の獲得を意図した非専修科目を配置している。特に、スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目が用意されている。さらに、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目は部門の枠を越えて幅広い知識の獲得を目指している。

博士課程後期では、博士論文指導を目的とした「特別研究」以外にも、全論文指導教員および論文指導補助教員によるオムニバス形式の科目を配置し、基本的なリサーチメソッドの獲得に資している。

### ◆ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

博士課程前期では、修士論文の完成度を高めるために中間報告会での発表と、外部からの評価を受けるために関連学会での発表を義務づけている。博士課程後期では、最終論文提出の半年前に中間報告に相当する研究計画書の提出・審査を義務づけている。また、博士論文の外部からの評価を受けるために国際誌あるいは全国誌への掲載を義務づけている。

## 2 2016年度 活動年譜



2016年		【学部】	【研究科】
4月	1日	入学式	入学式・新入生ガイダンス
	2日	新入生ガイダンス	
	4日	新入生懇談会 ステップアッププログラム「先輩と語る」第1回	
	9日	前期授業開始	
6～7月		修学指導	大学院推薦入試
6～7月		父母懇談会（本学・各地） 前期授業アンケート	
7月	2日		
	22日	前期授業終了	
	23日	前期定期試験開始	
	30日	前期試験終了	
	31・8月1日	プール実習	
8月	1日	前期集中授業開始	修論中間報告会
	1・2・3日	ゴルフ実習	
	4日	夏季休業開始	
	5日	前期集中授業終了	
	6日	オープンキャンパス	
	7・8日	プール実習	
	8日	AO入試特別講座①	
	9日	AO入試公開練習会①	
	11日		
	17～21日	キャンプ実習（前半）	
	23日	AO入試特別講座②	
	24日	AO入試公開練習会②	
	25～29日	キャンプ実習（キャンプⅡ）	
9月	2～6日	キャンプ実習（後半）	秋季大学院入試
	6日		
	6～9日	海浜実習	
	13日	夏季休業終了	

9月	14日	後期授業開始	後期授業開始
	24日	前期卒業式	学位記授与式（修士）
	27日		学位記授与式（博士）
11月	3・4・5日	学園祭	
	24・25日	A方式推薦入試	
	26日		釜山大学との学術交流会
12月	10日	学部祭	
	27日	ステップアッププログラム「先輩と語る」第2回 大学と社会 冬期休業開始	

2017年		【学部】	【研究科】
1月	4日	冬期休業終了	
	5日	後期授業再開	
		後期授業アンケート	
		シラバスチェック	
	14日	FD ワークショップ	
	14・15	センター試験	
	18日	後期授業終了	
	19日	後期試験開始	
	25日		
	27日	後期試験終了	
29日	卒業論文発表会 謝恩会		
2月	2日～	一般入試・系統別	
	3日～	一般入試・前期日程	
	7日～	一般入試・GS実技	
	8日		修士論文発表会・公聴会
	22日		春季大学院入試
3月	4日	一般入試・スポーツ科学部特別募集	
	6日	一般入試・後期日程	
	19日	卒業式	学位記授与式（修士）
		授業アンケート報告	
	21日	在学生履修登録開始	学位記授与式（博士）
	29日	在学生履修登録終了	

### 3 教員組織 (2016年度)

スポーツ科学部長 田 中 守

教 授	青 柳 領 (幼児発育発達・スポーツ計量論)
	乾 真 寛 (コーチ学・サッカー)
	岩 本 英 明 (スポーツ整形外科・スポーツ医学)
	上 原 吉 就 (スポーツ内科学・スポーツ医学・予防医学)
	柿 山 哲 治 (スポーツ教育学・保健体育科教育学)
	柿 本 真 弓 (コーチ学・ダンス・体操・新体操競技)
	片 峯 隆 (コーチ学・運動学・バイオメカニクス・陸上競技)
	川 中 健太郎 (スポーツ栄養学・生化学・分子運動栄養学)
	小牟礼 育 夫 (スポーツ方法学・バスケットボール)
	下 園 博 信 (スポーツ心理学・スポーツ方法学・ラグビー)
	瀧 田 伸 吾 (運動学・剣道)
	田 口 晴 康 (スポーツ運動学・体操競技・器械運動)
	田 中 宏 暁 (運動生理学・体力学・健康科学)
	田 中 守 (体力学・トレーニング学・生理学・ハンドボール)
	築 山 泰 典 (野外教育学・レクリエーション)
	中 原 一 (スポーツ方法学・柔道)
	布 目 寛 幸 (バイオメカニクス)
	檜 垣 靖 樹 (スポーツ生理学・健康運動学・予防医学)
	藤 井 雅 人 (スポーツ社会学・スポーツ教育学)
	向 野 義 人 (鍼灸医学・内科学・スポーツ医学)
	村 上 純 (スポーツ方法学・コーチ学・ラグビー)
	森 口 哲 史 (公衆衛生学・学校保健・ハンドボール)
	山 口 幸 生 (運動心理学・行動科学・テニス)
	米 沢 利 広 (スポーツ方法学・バレーボール)
特任 教授	深 江 久 嗣 (保健体育科教育学)
准 教 授	今 村 律 子 (保健体育科教育学・コミュニケーション論)
講 師	坂 本 道 人 (コーチ学・柔道)
	田 場 昭一郎 (コーチ学・競泳)
	長 島 和 幸 (体育哲学・スポーツ史・レスリング)
	野 口 安 忠 (コーチ学・スポーツ方法学・陸上競技)
	信 岡 沙希重 (コーチ学・陸上競技)
	渡 邊 正 和 (バイオメカニクス・コーチ学・硬式野球)

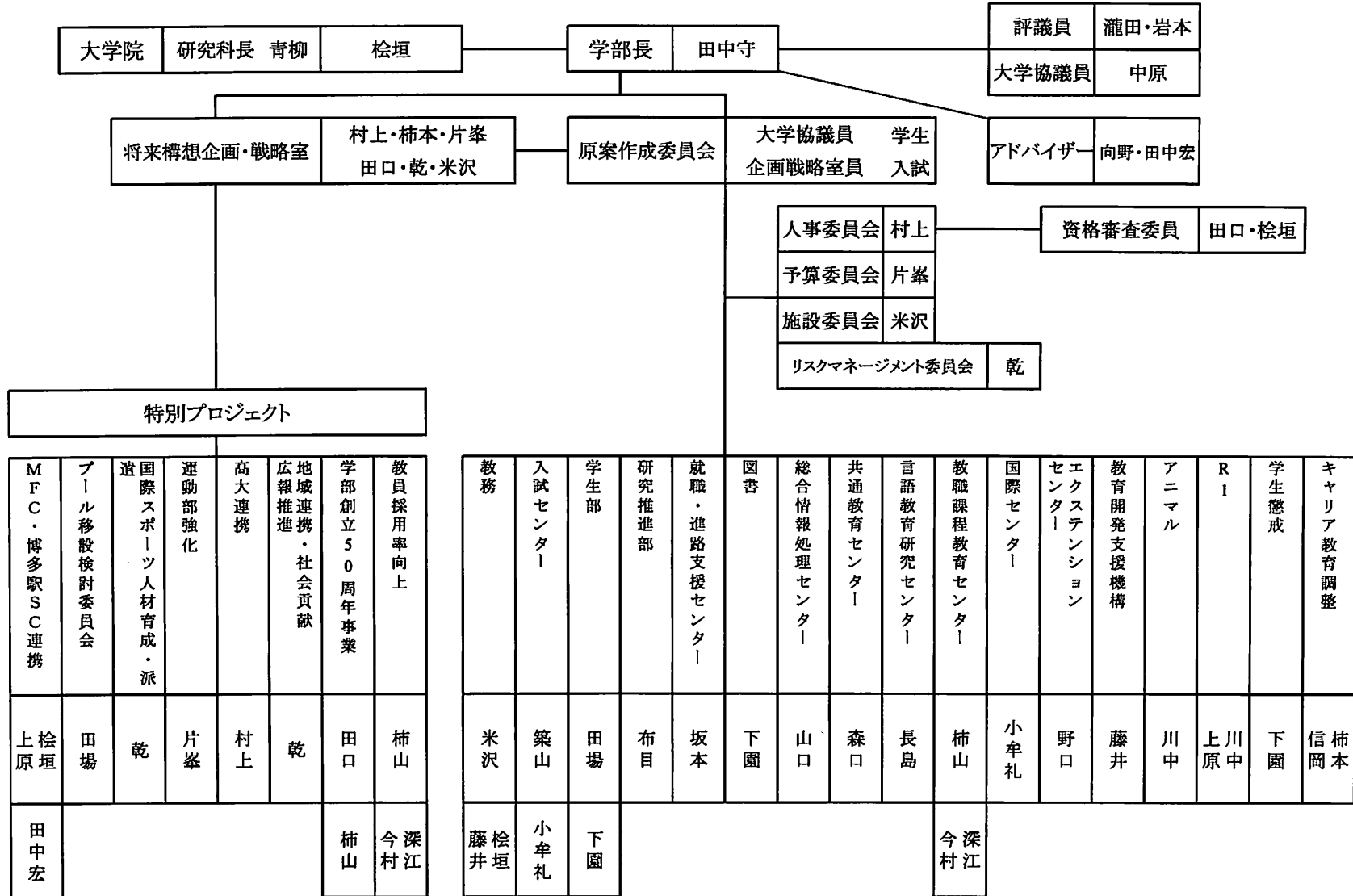
助	教	伊池泉	賀永原	崇昌嘉	人弘郎	助	手	大後高	山藤山	泰芽志	史衣保
		伊栗黒	藤田崎	寿昇辰	浩平馬			富花向	岡田尾	侑早	花紀彬
		田當中	方村眞	慎雄裕	哉志樹			森山山	本崎口	理百合	司香美
		橋秀水	原本	麻衣子	俊(中途退職)					郁祐一郎	
		森羅安	方	和泰佑	二郎毅						
				大成	樹圭						
					惇						

大学院スポーツ健康科学研究科 担当教員

スポーツ健康科学研究科長 青柳 領

教	授	青岩上	柳本原	領明就	教	授	築布檜	山目垣	泰寛靖	典幸樹
		柿川田	山中口	治太郎			藤向森	井野口	雅義哲	人人史
		田田	口中中	康曉守			山羅		幸成	生圭
					助	教				

# スポーツ科学部組織図(2016.4～)



## 4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義

### (1) スポーツ科学部

築山 泰典

#### ■ 推薦入試

A方式推薦入試においては、スポーツ科学科は、募集人員 54 名に対し、出願者 107 名で合格者 51 名（競争率 2.1 倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員 16 名に対し、出願者 17 名で合格者は 16 名であった。しかし、健康運動科学科では第二志望合格者 9 名を含むため競争率は 2.4 倍を示す。両学科とも競争率はバランスを保っているように見られるが、募集人員の少ない健康運動科学科において、第二志望合格を継続実施している状況もある。今後、各学科の特性を考慮した推薦入試制度の設置検討が必要なことと考える。

次に、スポーツ特別推薦においては、両学科を併せ募集人員 38 名程度で実施し、スポーツ科学科は、出願者 55 名に対し合格者 50 名（競争率 1.1 倍）、健康運動科学科は、出願者 3 名に対し合格者 3 名（競争率 1.0 倍）と、学部としては 53 名の合格者とする結果であった。

本推薦入試においては、大学全体としての運動部活動強化の意味合いが強く、全学として 78 名の出願に対し 68 名の合格者であり、合格者に占める本学部への入学者は 77.9%に及ぶ。平成 29 年度入試より、第一志望をスポーツ科学部、第二志望を他学部として出願することができる制度の変更を提案した。しかし、運用面での具体的な方向性が示されていないなどの課題があったため、この提案は採用されなかった。他にも附属推薦入試及び指定校推薦入試を実施しており、平成 29 年度推薦入試では、学部入学定員 280 名に対し、推薦入試合格者数が 140 名で 50%となった。今後は、全学的な運動部活動強化に向かうことが必要と考えることから、募集人員の見直しを含む本学部に関わる入試制度の継続的検討をしていきたい。

表 1. 推薦入試状況

学科	A方式推薦入試					スポーツ特別推薦入試			
	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	募集人員	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	54	107	107	51	2.1	38 程度	54	49	1.1
健康運動科	16	17	17	* 16	2.4		5	2	1.2

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）、（スポーツ特別推薦入試は志願者÷合格者）\*欄は第二志望合格者(9人)を含む

(福岡大学入試ガイド 2017 P72 より一部抜粋)

#### ■ AO入試

特別講座及び公開練習会への参加者は、302 名と昨年度の 358 名に対し 15.6%の減少を示した。その理由として、2016 年度は公開練習会の実施日を 3 日から 2 日に減らしたこと、事前の参加申し込みが FAX からインターネットに変更された等の要因も影響したものと考えられる。今後も参加者数の動向を検証する必要がある。

スポーツ科学科は、募集人員 33 名に対し、出願者 167 名で合格者 33 名（競争率 5.1 倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員 7 名に対し、出願者 15 名で合格者は 7 名であった。

しかし、健康運動科学科では第二志望合格者 3 名を含むため、競争率は 3.8 倍を示す。過去の AO 入試では、スポーツ科学科に比べ健康運動科学科の競争率が非常に高い傾向にあったが、本年度は改善された。次年度も健康運動科学科の出願状況を注視する必要がある。

表 2. AO 入試状況

学科	募集人員	公開練習会等の参加者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	33	302	167	33	5.8
健康運動科	7		15	* 7	3.8
合 計			182	40	4.9

競争率=受験者÷合格者（第二志望合格者を除く）\*欄は第二志望合格者(3人)を含む

(福岡大学入試ガイド 2017 P74 より一部抜粋)

## ■ 一般入試

系統別入試において、スポーツ科学科は、募集人員 5 名に対し、受験者 96 名で合格者 18 名（競争率 5.3 倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員 2 名に対し、受験 76 名で合格者 13 名（競争率 5.8 倍）であった。

また、前期日程では、スポーツ科学科の募集人員 60 名に対し、実技型においては受験者 314 名で合格者 82 名（競争率 3.7 倍）、小論文型においては受験者 93 名で合格者 20 名（競争率 4.7 倍）と、それぞれ示す結果であった。また、健康運動科学科は、募集人員 20 名に対し、受験者 177 名で合格者 42 名（競争率 4.2 倍）であった。次に後期日程では、スポーツ科学科は、募集人員 7 名に対し、受験者 43 名で合格者 8 名（競争率 5.4 倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員 3 名に対し、受験者 16 名で合格者 6 名（競争率 2.7 倍）であった。

次に、センター試験利用 I 期では、スポーツ科学科は、募集人員 5 名に対し、受験者 117 名で合格者 29 名（競争率 4.0 倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員 3 名に対し、受験者 47 名で合格者 15 名（競争率 3.1 倍）であった。最後にセンター試験利用 II 期では、スポーツ科学科は、募集人員 4 名に対し、受験者 87 名で合格者 16 名（競争率 5.4 倍）であった。また、健康運動科学科は、募集人員 3 名に対し、受験 64 名で合格者 14 名（競争率 4.6 倍）であった。

一般入試において、日程及び試験形態の違いから多様な入試形態が展開される状況にある。今後も学部・学科としての求める学生像をより明確に示すことで、「より高い目的意識を持った入学者の獲得」を目指すことが今後必要であろう。

一般入試（系統別日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	5	98	96	18	5.3		304	261
健康運動科	2	77	76	13	5.8		309	261



一般入試（前期日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	60	実技型						
		314	306	82	3.7	0	234	182
		小論文型						
		96	93	20	4.7	0	222	177
健康運動科	20	180	177	42	4.2	0	249	192

一般入試（後期日程）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	7	45	43	8	5.4
健康運動科	3	17	16	6	2.7

大学入試センター試験利用入試（Ⅰ期）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	5	119	117	29	4.0
健康運動科	3	47	47	15	3.1

大学入試センター試験利用入試（Ⅱ期）

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	4	87	87	16	5.4
健康運動科	3	64	64	14	4.6

競争率＝受験者÷合格者

一般入試（系統別日程）は400点満点。

（福岡大学入試ガイド2017 P64-65より一部抜粋）

## ■ 学生数及び卒業生数

平成28年5月1日段階でのスポーツ科学部学生数は、スポーツ科学科957名（1年次234名、2年次245名、3年次224名、4年次以上254名）、健康運動科学科315名（1年次76名、2年次78名、3年次75名、4年次以上86名）の合計1,272名である。

この時目安となる年間取得単位数を30単位と設定し、それに満たない学生の各学年の割合は、2年次生11.0%、3年次生10.0%、4年次生12.2%と示される状況にあり、前年と比較すると各学年で改善傾向が示される。また、平成28年度本学部の卒業生比率は88.4%と昨年の85.1%と比べ改善が示される。これは本学の他学部と比較して第2位と上位の卒業生比率を示している。文部科学省の指導による入学者数の厳格化により、入学者数の制限を指導される場合もあり、面談等の継続的な実施による成績不良者数の減少に努め、卒業率の向上を目指す必要がある。

学生数 (平成 28 年 5 月 1 日現在)

学科	学科総数	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次以上
スポーツ科学科	957	234	245	224	254
健康運動科	315	76	78	75	86
合計	1,272	310	323	299	340

学部・年次別の単位修得不振者の状況% (前年) (平成 28 年 4 月 1 日現在)

	平成 28 年度入学生 (16 台)	平成 27 年度入学生 (15 台)	平成 26 年度入学生 (14 台)
修得単位 学部・学科	30 単位以下	60 単位以下	90 単位以下
スポーツ科学部	11.0(12.6)	10.0(12.9)	12.2(14.0)

(平成 29 年度父母懇談会のしおり p10-11 より一部抜粋)

## ■ 出張講義

2016 年度入学センターより依頼があり実施した出張講義・模擬講義数は 14 件(生徒総数 681 名)であった。福岡県下での実施が 10 件と最も多いが、大分県、鹿児島県、佐賀県、熊本県からも依頼があり、それぞれ教員の協力により実施することができた。2016 年度より出張講義ガイドブック「福岡大学模擬講義 NAVI」も発行され、本学部教員 17 名も掲載されている。また、昨年に引き続き 10 月 15 日にはマリンメッセ福岡で開催された「夢ナビライブ 2016」に参画し、生徒と直接かかわる機会を得た。

受験者数が減少することに対する積極的な対応として、広報活動もより必要になるものと考え

## ■ 平成 27 年度入試状況

## アスリート推薦入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	1	1	1

## 一般入試

	秋季*			春季*		
	志願者	受験者	合格者	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	7	7	7	6(1)	6(1)	4(1)
博士課程後期	0	0	0	3(2)	3(2)	3(2)

\* ( ) 内 社会人

## 推薦入試\*\*

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	1(1)	1(1)	1(1)

\*\* ( ) 内 早期履修者数

## ■ 平成 28 年度 学生数及び修了生数

## 学生数 (平成 28 年 5 月 1 日現在)

	研究科総数	1 年次 (飛び級含む)	2 年次	3 年次 (後期のみ)
博士課程前期	20	13	7	
博士課程後期	14	4	4	6
合計	34	17	11	6

平成 28 年度の卒業生については、博士課程前期修了 5 名、早期修了 1 名の合計 6 名が学位（修士号）を取得。博士課程後期修了 1 名が学位（博士号）を取得し、満期退学が 1 名であった。

## 5 学部教育活動

### (1) 入学前教育

築山 泰典

平成 29 年度 AO 入試及び推薦入試合格者 174 名に対し、外部業者と連携し、基礎国語 3 講、スポーツ科学入門 7 講の計 10 講からなる通信教育による入学前教育を実施している。今年度は、2 月段階で、全員に入学前教育を実施することができた。

しかし、2 講目までは提出率が 100%であるが、後半実施率は低下したものの、最終 10 講まで提出することができた受講生は 162 名(93.1%)と昨年の 85.1%と比べ高い到達率となった。しかし、得点は昨年度平均 92.7 点を示していたが、今年度は 91.5 点と 1.2 点低下する状況であり、3 年連続低下している。特に第 10 講のデータ処理に関しては、例年、他講と比較すると、著しく低値を示し、昨年の 73.4 点から 70.3 点と低下した。数値等のデータ解釈が苦手な受講生が多い状況にあり、数学関連科目の強化を検討する必要があるものと考ええる。

本教育に対する受講生の評価について、DVD の講義の進度は 65.3%の受講生が「ちょうど良い」と回答しており、また講師の教え方も 30.6%の受講生が「分かりやすい」と回答している。確認テストのレベルも 58.1%の受講生が「ちょうど良い」回答しており、この講義を受けての評価も 79.8%の受講生が「良かったと思う」と回答している。本取り組みは、受講生にとっても概ね好評であると考えられることができる。

### (2) 新入生懇談会

田場 昭一郎

新入生懇談会は、以下の内容を新入生に理解させ、活力ある学生生活となるための動機づけを行うものとし実施している。

- 1) 福岡大学の校訓を理解し、充実した学生生活を送るための諸注意。
- 2) スポーツ科学部生としての自覚を促し、スポーツ活動に専心する心構えと勉学に励む態度を啓発する。
- 3) 各種委員からのガイダンスにより、学生生活を円滑に始められるようにする。

<日 時> 平成 28 年 4 月 4 日 (月曜日) 9 時集合 (開会 9 時 15 分)

<場 所> A 棟 201 教室および第二記念会堂体育館

<内 容> スポーツ科学部長挨拶

健信会会長挨拶

総務委員からの案内

学生部ガイダンス (大学生活に関わる諸問題とその対応について)

福大生ステップアッププログラム「先輩と語る」

海外研修報告

- (1) 体育・スポーツのエキスパート教育プログラム
- (2) JICA ボランティア派遣事業プログラム

日本語力テスト

各種委員会からの連絡と諸注意

- (1) 就職進路支援センター委員
- (2) 国際交流センター委員
- (3) 図書委員
- (4) 健康管理センター
- (5) HDセンター
- (6) 福岡リーガルクリニック法律事務所

早良警察署による連絡と諸注意（防犯・交通マナー講習）

福岡大学校歌の斉唱

スポーツ科学部教職員スタッフ紹介

各担当教員によるクラス担任別懇談会（グループディスカッション）

部活動アンケート調査

## 成果報告および点検評価

例年、スポーツ科学部の学部行事として新入生懇談会を実施している。本会では、学部生が授業で使用する学部ユニフォーム（赤色のジャージ）を着用して参加することを義務付け、さらに挨拶励行、行動敏速、時間厳守を徹底し、この会を通じて、体育・スポーツに関わる者として、体を動かすことの社会的役割や生涯的価値を学ぶ先駆けとなるよう心掛けている。

会に先立ち、スポーツ科学部長より、入学後にスポーツ科学部生として自覚を持つ事、学部のカリキュラムポリシーを十分に理解して自己研鑽に励む事、文武合一して多くのことを学んでもらいたいとの挨拶が行われ、健信会会長（福岡大学スポーツ科学部の同窓会）からは、有信会（福岡大学の同窓会）との関わりや、卒業生との帰属意識を高めることの意義について説明が行われた。これらの講話は、社会人となるまでの最終教育機関の位置付けにある大学教育の導入教育として心に響く内容である。また学生部ガイダンスでは、学生生活を送るにあたっての諸注意、困った時の学内における対応窓口について、さらに実際の学生生活で起こりうる諸問題なども事例を挙げて説明している。

また、スポーツ科学部の年間行事で新入生懇談会とスポーツ科学部祭を実施している。これらの行事においては、「福大生ステップアッププログラム ～先輩と語る～」を企画し、本学部を卒業した先輩方へ講話を依頼している。本年度は、熊本県の高校教諭である池田裕二郎先生にご講話を頂いた。池田先生は、卒業5年目で教師として現場で活躍しており、教員を目指す学生にとって非常に興味深い話であったため、新入生も熱心に話を聞いている様子が伺えた。さらに海外研修報告では、「ピークパフォーマンス演習 II」の授業と並行し「体育・スポーツのエキスパート教育プログラム」を利用して海外研修に行った学生のプレゼンテーションが行われた。特に競技においてトップアスリートを目指す新入生にとって貴重な発表内容であった。また、本年度から「コーチ法実習」の授業と並行し「JICA ボランティア派遣事業プログラム」を利用して海外

研修に参加した野球部とサッカー部の学生の発表も行われた。このプレゼンテーションも、JICAと提携したスポーツの普及活動として、「スポーツを支える」という観点から行われた新たな企画で、慣れない土地での先輩方の活躍に、新入生も興味を示す様子が伺えた。

午後の部では日本語力テストを実施しているが、この日本語力テストの結果は、1年次生の必修科目であるフレッシュマンセミナーの文章力講座と関連付けており、また各教員が行うクラス面談（この面談については後述する）で学生にフィードバックし、入学後の文章力向上のための指導に役立てている。そして、スポーツ科学部の各委員（就職進路支援センター国際交流センター・図書）と、学内の各センター（健康管理センター・メンタルサポート・法律相談）など、学内での施設や受付窓口に関する事細かな説明が行われた。最後に第二記念会堂に場所を移動し、在学中に学生指導に携わる教員の紹介、各教員が担当するクラスに分かれ、グループディスカッションやアンケート調査を実施し、充実した内容となっている。

### **（3）クラス面談・修学指導**

田場 昭一郎・米沢 利広

#### **■ クラス面談について**

スポーツ科学部では、1・2年次生を対象にクラス別個人面談（グループディスカッション）を実施している。クラス別個人面談は、講師以上の専任教員が10～12名程度のクラスを担当し、定期的に学生の実態調査を行うものである。この取り組みは、学生の生活状況や生活態度を把握するとともに、学生に対する注意喚起を目的としている。これは、大学生活を通じての授業等や正課外活動、または所属する運動部やサークル等の課外活動、アルバイト等の活動における問題点や悩みなどに対応し、個々にアドバイスできるような指導体制になっている。なお、クラス面談の実施内容と日程については以下の通りである。

- 1) 新入生懇談会でグループディスカッション（4月4日）
- 2) 各担当教員における1年次生を対象とした個人面談（前後期に各1回）  
前期：7月13日・後期：9月21日
- 3) 各担当教員における2年次生を対象とした個人面談（前後期に各1回）  
前期：5月16日～27日・後期：9月26日～10月7日

1年次生は、学士課程の教育充実を図るために、基礎教育と導入教育を目的とした「フレッシュマンセミナー」が開講されており、その授業の1コマとして前後期に各1回ずつクラス面談を実施している。

2年次生は、継続的な指導として、1年次に担当した教員により引き続き個別指導が実施され、前・後期にクラス面談が行われる。

3年次生以降は、必修科目である卒業論文の事前指導として開講されている「スポーツ科学演習」を履修するため、各担当教員のゼミナールに所属し、その後、卒業までゼミナールの担当教員によって個別指導が行われる。

スポーツ科学部では、このような取り組みによって徹底した学生の指導体制を構築しており、学生も様々な立場にある教職員のアドバイスを受け、4年間の充実した学生生活が期待され、その成果は非常に大きい。

## ■ 修学指導について

スポーツ科学部は、前述した通り全学生を対象としたクラス別個人面談と修学指導対象の学生に対して面談を実施している。クラス面談でも、指導が困難な学生には、修学に関連する委員（教務委員、学生部委員、入試委員、教務関係担当）によって、修学指導を実施している。対象となる学生は以下の通りである。

- 1) 2年次生：前年度の取得単位数が23単位以下の学生（登録単位数の半分以下の学生が対象）
- 2) 3年次生：前年度までの取得単位数が46単位以下の学生
- 3) 4年次生以降：1～3年次までの取得単位数が77単位以下の学生（卒業見込みなし）

2016年度は、41名の学生（2年次生：10名、3年次生：13名、4年次生以降：18名）を対象に、掲示によって連絡し、2016年6月14日（火）16時30分から1221教室において、出席した13名（2年次生：8名、3年次生：4名、4年次生以降：1名）の学生に対して修学指導を行った。欠席者の28名については、再掲示によって連絡し、呼び出しを行なった。1回目を欠席した28名の対象学生で、2回目の修学指導に出席した学生は、6名（3年次生：4名、4年次生以降：2名）で、最終的に46.3%の出席率であった。これらの修学指導は、教務委員、学生部委員、入試委員および教務関係担当の教員によって個別に面談した。

面談の内容については、修学指導記録書に「なぜ単位を取れなかったのか?」、「今後の対応はどうするのか?」といった点を中心に記録して学生の指導を行った。単位が取れなかった学生の理由としては、「授業の欠席が多いこと」、「試験勉強が十分にできなかったこと」、「試験そのものができなかったこと」が挙げられた。1年次生の時には安易に単位が取れると油断して単位が取れなかった学生や、試験勉強の方法がわからない学生もいた。このような点を踏まえて、試験勉強に対するアドバイス、授業への出席の指導、今後の進路に対するアドバイスを行った。

この修学指導の面談について、掲示前の2016年5月11日の教授会で修学指導対象者を報告し、6月1日の教授会においても再報告を行い、さらに面談結果についても7月6日（水）の教授会で報告している。1年次生については、前期は定期試験前となり、事前に修学指導が行えないため、5月11日（水）の教授会にて、クラス担任による面談を通じて単位取得に関する注意と事前指導をお願いしている。今後は個人面談の際に、入学後の数ヶ月間の授業欠席率などを提示して、これまで以上に充実した指導が行えるよう改善していきたい。

これらの修学指導やクラス担任制の面談を実施することによって、スポーツ科学部の学部別卒業生比率（平成28年度）は、医学部看護学科の89.6%に次いで88.4%と高い卒業生比率となっており、さらに昨年度（85.1%）よりも上昇していた。このことは、1年次からのクラス担任制による年4回の面談と、2年次以降の学生に対する早期の修学指導の効果は十分に表れているものと考えられる。

今後のクラス担任による面談や修学指導については、1年次生の早い時期から学業やクラブ活動及び大学生活全般に対する指導を継続していく必要がある。また修学指導対象者の約25%が運動部に所属していない学生であるため、クラス担当教員の個人面談指導が重要となる。修学指導対象者の75%は運動部に所属しているため、各運動部の担当の教員、またはゼミナール担当の教員による指導の徹底を図らなければならない。さらにGPAと入学形態の関連性についても実態調査を行い、今後の面談資料として活用していきたい。

#### (4) フレッシュマンセミナー授業方法

柿山哲治・桧垣靖樹

本セミナーは、学生自身が「如何に学び、社会に貢献するか」について自問自答ながら自学自習を实践し、スポーツ科学部生としての規範とスポーツ科学部で学ぶ専門領域を理解し、卒後の進路と目標を明確に示すことができるようになることを目的としている。

授業内容は、1) 田中守学部長による「スポーツ科学部生として、理論と実践が融合した文武合一のすすめ」、2) 体育学部一期生の水原博而氏による「体育学部の歴史からその伝統と誇り」、3) コンピテンシー診断テスト、4) 外部講師による文章力講座、5) 日本語力テスト、6) 本学知的財産センターの中川勝吾准教授による「スポーツと知財について」、7) 教育開発支援機構の須長一幸准教授による「言葉の力」、8) スポーツ科学部全教員による専門性を生かした講義、9) スポーツ科学部全教員による1年次学生に対する個別の修学指導、などで構成されている。以下に、特筆すべき取り組みについて記載する。

コンピテンシー診断テストは、本学就職支援センターの協力を得て、テストの実施とその結果の解説を実施している。コンピテンシーとは、高い成果を生み出す人の特徴的な行動特性のことをいい、学生生活で身につけたい6つの力、要望に応える力、新しい価値を創る力、何かを変える力、きちんとやる力、自らを活かす力、互いを活かす力を評価し、解説を加えることで、学生への気づきを促している。

文章力講座は、平成22年度から中学・高校で国語教員を務めた退職教員に講師依頼し、作文を主な課題とした内容を実施している。この講座の狙いは、単に語彙を向上させるだけでなく、1) 読み手意識を持った文章が書ける、2) 自分をしっかり見つめた文章が書けるようになる、というものである。1クラス30名(前半・後半)で、5名の国語教師が担当し、課題作文の作成—作文指導と添削—課題作文の再提出といった流れで授業を進めている。受講した学生からの感想では、「文章力がついた」「書き方がわかった」「自分のためになった授業だった」「成長した気がする」など肯定的な評価が多数を占めている。特に受講生の50-60%が「読み手意識を持った文章が書けるようになった」と回答している。

日本語力テストは、日本語の読む・書く・話す能力は「語彙の豊富さ」から推定可能である、という視点で旧メディア教育開発センターが開発したものを平成18年度より実施している。テストは1年生入学時(4月)、1年生フレッシュマンセミナー終了時(7月)、および1年生12月の年3回の実施となっている。測定結果は、年に2回行われるクラス面談(各専任教員が1学年12名程度を担当)時に配布し、1年生の基礎学力把握と学習指導の資料として有効に活用してい



る。大学生の読書習慣低下やスマートフォンの普及による言葉の簡素化が、多くの専門家に指摘されるところである。これまでのところ、スポーツ科学部生の日本語力は、他学部生より低いことが判明してきている。

言葉のカプログラムは、1) グループで学習するための基本的なノウハウを身につけ、実践する、2) 論理的な文章の構造を把握し、実際にそうした文章の骨格を作る、をねらいとして展開している。テーマは、①「部活動において厳しい上下関係は必要か」、②「体罰について」など、身近な課題を用いている。具体的な例を掲げてディスカッションすることで議論の深まりが感じられ、関連する要因の可視化は論点の整理に有用と思われる。2016年度は須長一幸准教授の指導を仰ぎながら、①を桧垣、②を柿山が担当し、その講義の様子が福岡大学学園通信 56 (January, 2017) に Active Learning として紹介された。

## (5) ステップアップセミナー授業方法

坂本 道人

### ■ 本講座の背景

#### ①本講座の背景

2016年度の全国大卒求人倍率は、1.74倍（前年度1.73倍 リクルートワークス研究所調べ）となっており、企業の採用意欲の高い状況が続いている。本学に寄せられた求人についても6,737件（前年度比131件増、2.0ポイント増）、来学企業件数は1,571社（前年度比109社増、7.5ポイント増）で、6年連続の増加となった。このような状況のなか本学部の就職率は、男子97.2%、女子98.5%、全体97.6%であった。就職率だけをみると、就職状況は良好であるといえるが、今後、本学部が就職支援において目指すべきものは、学生個々の就職満足度の充実を図ることにあるといえよう。

#### ②本講座のねらい

2016年度の就職活動開始時期については、前年度同様、企業の広報活動日が3月1日以降、選考活動開始日が6月1日以降であり、短期決戦型と言われる状況が続いている。このような状況を受けて本講座は、学生がよりスムーズに充実した就職活動を展開できるよう、活動を開始する直前の2年次後期に開講されている。内容についても、本学部生に関係の深い職種や学生の要望に沿った講師の方々をお招きし、自身の体験談、社会の実情、現時点で身につけておくべきスキルなど様々な内容が盛り込まれている。また、今や就職試験や採用試験では一般的であるSPIの小テストを毎時間実施するなど、継続的に一般教養力を高めることも併せて取り組んでいる。このように、学生一人一人の就職活動に対する興味を促し、この時期に何を考え、何を準備しておくべきかを考えさせることが本講座のねらいである。

#### ③今年度の新たな取り組み

今年度においても、授業アンケートによる学生の意見や、前述した社会情勢などを考慮し、新たな工夫に取り組んだ。まず、近年の公務員志望者増加に伴う措置として、昨年度の現役警察官

に引き続き現役消防官、現役中学校教員による講義を取り入れた。続いて、青年海外協力隊経験者や昨年度本学と独立行政法人国際協力機構（JICA）の間で締結されたボランティア事業経験者による講義も取り入れるなど、グローバル人材育成も視野に入れた内容も加えた。さらには、近年、文部科学省において大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっていることを受け、コンピテンシーテストとその後のフォローアップセミナーも併せて実施した。

#### ④成果と課題について

これまでの本講座に対する学生の評価については、「将来、消防官を目指す私にとってとても興味深い内容だった」、「教員という仕事の大変さに触れ、改めて教員になりたいと感じた」、「青年海外協力隊について興味を持った」など、興味・関心の高さが認められた。しかし、「留学や海外での活動についてもっと情報が欲しい」、「他の公務員の話を知りたい」、「現任教員の話をもっと聞きたい」など、新たな学生からの要望も示された。学生を取り巻く就職状況は前述のとおり毎年大きく変化している。本講座においても、それらの変化に対する迅速な対応が求められている。今後の本講座の課題については、就職進路支援センターが推奨するインターンシップ（就業体験プログラム）関係講座の積極的な導入や、本学の教育理念にもあるグローバル人材育成に即した、海外留学という選択肢の話題にも力を入れることが挙げられる。これらの点を来年度以降に向けた課題として、本講座の更なる充実を図っていきたいと考える。

## 6 学部 FD・SD 活動

### (1) シラバス点検

藤井 雅人

スポーツ科学部では、毎年1月中旬に教務委員が中心となって、非常勤講師を含む科目担当教員から提出された次年度用の全シラバスの確認作業を行っており、平成28年度で7年目を迎えることとなった。

平成29年度シラバスの確認作業は、平成29年1月12日に、スポーツ科学科の確認作業担当者(田口晴康、藤井雅人、森口哲史)、健康運動科学科の確認作業担当者(檜垣靖樹、山口幸生)、確認作業担当者作成分確認者である教務委員の米沢利広が行った。その際、特に「授業の到達目標」および「評価基準および方法」についての記載内容を、次のような観点に基づき確認した。すなわち、「授業の到達目標」については、「学生が主体で書かれているか」「具体的に箇条書きされているか」「客観的に測定できる目標を設定しているか」、また「評価基準および方法」については、「評価基準、評価方法、割合に分けて書いてあるか」「到達目標に対する評価基準が記載されているか」「評価基準は測定可能なものになっているか」等の観点である。また、「授業時間外の学習(予習・復習)について記載されているか」「授業中の態度、遅刻等の取り扱いといった注意点は、履修上の留意点で言及されているか」「15回の授業計画が適切に記されているか」といった点についても確認がなされた。その際に適切でないと判断された内容については、科目担当者に修正の上、再提出するよう求めた。こうした修正の取り組みもあって、平成29年度シラバスは全体的に見て、「シラバス作成のためのガイドライン」に則って適切に記載された内容に統一されることとなった。

### (2) 学外研修参加

藤井 雅人

平成28年度は、スケートおよびスキー実習担当者の中から計7名が、以下の学外実技研修に参加した。

・平成28年12月17・18日に長野県軽井沢風越公園アイスアリーナで開催された、大学スケート研究会主催の第58回大学体育指導者スケート研究集会に、藤井雅人、黒崎辰馬の2名が参加した。

・平成28年12月26～28日に岐阜県平温泉スキー場およびほうのき平スキー場で開催された、公益社団法人全国大学体育連合東海支部主催の平成28年度冬季スノースポーツ研修会に、スキー研修を目的に下園博信、布目寛幸、森口哲史の3名が参加した。

・平成29年1月3～6日に長野県菅平高原スキー場で開催された、大学スキー研究会主催の平成28年度大学体育スキー指導者研究集会に、今村律子、田村雄志の2名が参加した。

上記の学外実技研修参加者によって作成された詳細な報告書は教授会において報告され、研修内容の情報共有が図られた。また、スケートおよびスキー実習中に研修参加者から他教員への研修内容の伝達にも取り組まれた。

さらに、水崎佑毅が、平成 29 年 3 月 14・15 日に沖縄県青年会館で開催された、九州地区大学体育連合および公益財団法人全国大学体育連合主催の第 5 回大学体育研究フォーラムに参加した。大学体育の価値や授業づくり等の研修内容に関する報告書が教授会で報告され、大学体育の振興に関する最新の情報が紹介された。

### (3) ワークショップ

藤井 雅人

平成 29 年 1 月 13 日にスポーツ科学部第二記念会堂 1222 教室において、山本啓一氏（北陸大学教授）を講師とする「PROG コンピテンシーテストを活用した教育方法」と題した平成 28 年度スポーツ科学部主催 FD ワークショップを開催した（資料 1）。参加者は、講師以上の専任教員および助教・助手を合わせて、計 41 名であった。

前年度のワークショップが、コンピテンシーそのもの、またそれを測定するコンピテンシーテストやその結果の見方といった基本的な情報の理解の推進を目的に実施されたことを受けて、平成 28 年度のワークショップは、その内容を発展させる意図で、コンピテンシーテストおよびその活用を通じた、スポーツ科学部教員による具体的な教育方法の開発・実行のヒントを得るために開催されることとなった。

そして実際に、同ワークショップでは、コンピテンシーの育成が大学教育にとっていかに重要であるのか、またそれを育成する実践例にはどのようなものがあるのかなど、教育活動の展開にとってより具体的な内容を扱うことになり、今後の学部教育におけるコンピテンシーの活用についての大きな示唆を得ることができた。ただし、最終的な目的であるコンピテンシーテストの結果とその解説・フィードバックに基づく教育方法についての議論があまりできなかったため、今回は改めてその点に重点を置いたワークショップを実施する必要があるだろう。

### (4) 授業アンケート（実施、各教員への結果の通知、アンケート結果の公開、各教員による報告書の提出、報告書のまとめ）

藤井 雅人

平成 28 年度は前期 7 月 11 日および後期 12 月 12 日から、各科目担当者によって受講生を対象とする授業アンケートが実施された。授業アンケート実施後は、業者による集計作業がなされ、次学期はじめに各教員に各科目についての集計結果が通知された。したがって、平成 28 年度には、平成 27 年度後期および平成 28 年度前期に実施した授業アンケートの集計結果が取り扱われたことになる。

また、各科目を共通教育科目である「生涯スポーツ演習」および「生涯スポーツ論」、および専門教育科目である「専門実技科目」「専門講義科目（必修）」「専門講義科目（選択）」「実験・実習・演習科目」「スポーツ科学演習・卒業研究論文」（ただし後期のみ）に分類し、それぞれの科目領域の平均点を学部施設内掲示板および学部ホームページ上で公開した（資料 2-1、2-2）。さらに、教員が学部事務室において全ての科目の集計結果を閲覧できるようにした。

スポーツ科学部では各教員に、授業アンケートの結果に基づき講義および実技それぞれ1科目について「シラバスに示した到達目標に対する自身の評価と学生の達成状況について」「今回の改善点とそれによる学生の反応について」「次回の改善点について」という3つの項目に関して記述した「授業改善報告書」の提出を義務づけている。平成28年度には、在職する講師以上の専任教員および助教・助手の全員から平成27年度後期（53名）および平成28年度前期（57名）の授業改善報告書が提出された。また、それぞれ9名および12名の非常勤講師からも授業改善報告書が提出されている。全ての授業改善報告書は、氏名のみが伏される形で、学部事務室内において教員を対象に公開された。この授業改善報告書については、平成22年度の導入から平成28年度前期分まで計9回提出されていることになり、毎回前年度あるいは前回の反省を踏まえた改善報告が克明に記されるなど、全教員の積極的かつ継続的な改善努力が看取される。

各教員の授業改善報告書は、学部FD・SD委員会によって「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ論」「生涯スポーツ演習」に分類した形で「授業改善報告書まとめ」として集約・総括される。また、それとは別に、同委員会によって授業改善報告書の上記3つの質問項目に関する各教員の記述内容（コメント）を記した「『授業改善報告書』コメント集」が作成され、各教員の授業改善の試みの網羅的な紹介とその情報共有が図られている。なお、平成28年9月30日に平成27年度後期の授業改善報告書まとめが、また（年度をまたいでしまっているが）平成29年4月5日に平成28年度前期の授業改善報告書まとめおよび「授業報告書まとめ」コメント集が、それぞれ教授会で報告されている。なお、両者の授業改善報告書まとめとそのコメント集は全てPDF文書として、授業における教育の質向上に資することを目的に、助教・助手を含めたスポーツ科学部教員に学部事務員を通してメール配信されている（平成28年10月3日および平成29年4月6日）。

両方の授業改善報告書まとめでも総括しているとおり、「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ論」「生涯スポーツ演習」の全領域において、多くの教員がシラバスに示した到達目標を概ね達成できたとしている。また、提出された授業改善報告書によれば、多くの講義科目で、ミニッツペーパーの活用、配布資料や映像をはじめとする教材の利用などを通して、学生に理解しやすい授業展開に心がけられているが、授業内容の一層の精選、話し方やスライドの映し方の改善、受講態度に問題のある学生への適切な対応などが課題として認識されている。実技授業に関する授業改善報告書の多くでも、理解しやすい動作説明、映像の活用、受講者間での熟練者による非熟練者への指導・助言など、授業づくりのための多様な工夫が確認される一方で、技能や意欲に関する個人差への対応の必要性とその難しさに頻繁に言及されていた。なお、講義・実技授業ともに、様々な形態でのアクティブ・ラーニングの導入に努力されている状況が、授業改善報告書から窺えることとなった。

## 平成28年度スポーツ科学部主催FDワークショップ

# PROGコンピテンシーテストを 活用した教育方法

### ●ねらい:

PROGコンピテンシーテストで、学生の特徴を把握したら、各学生の強みをどう伸ばしていくか、弱みをどう克服するか、そして、そもそも学生に自身のコンピテンシーをどう意識してもらうか、その教育法を考えます。



**講師： 山本啓一**  
北陸大学  
未来創造学部  
教授(学長補佐)

九州国際大学法学部にて2008年から2012年まで法学部長を務め、退学防止対策、初年次教育改革、ジェネリックスキル育成、カリキュラム改革を手がける。その後も、産業界GP九州ブロックでルーブリック等の学修評価に関する取り組みを行う。初年次教育学会理事。

現在は北陸大学において、学長補佐・教務部長として教育改革と新学部(経済経営学部)の立案に携わる。来年度新設される2つの新学部でそれぞれコンピテンシーとリテラシーを評価する新入試(21世紀型スキルAO入試)を導入。

### プログラム(90分):

- 1) イントロダクション
- 2) 測定法  
ールーブリック  
ーPROGコンピテンシーテスト
- 3) 授業内外での教育方法  
(事例を交えて)
- 4) 質疑応答

【日時】 2017年1月13日(金) 16:30～18:00

【場所】 スポーツ科学部 第二記念会堂 1222教室

【対象】 福岡大学教職員

【問い合わせ先】 スポーツ科学部事務室(内線:2266、2267)

※参加のお申し込みの際はお名前とご所属をお伝えください

## 平成27年度後期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

スポーツ科学部では平成27年度後期(12月)に授業アンケートを実施しました。  
本学部の教員が行う全授業科目を対象に各質問項目の評価を集計し、授業形態別に平均値を出しました。結果は以下のとおりです。

なお、評価は5段階で行い、「共通質問項目」の平均を表記しています。

## 結果 1.生涯スポーツ演習(スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 151 アンケート実施科目数: 149】  
履修登録数: 4,202名 アンケート実施対象者数: 4,153名 回答者数: 3,435名  
回答率: 82.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.4
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.5
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.5
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.4
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.4
A-10 この授業に満足している	4.4

## 結果 2.生涯スポーツ論(スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 12 アンケート実施科目数: 12】  
履修登録数: 1,496名 アンケート実施対象者数: 1,496名 回答者数: 913名  
回答率: 61.0%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.5
A-2 授業は理解しやすかった	3.6
A-3 教師の熱意を感じた	3.7
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.8
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.8
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.7
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.8
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.1
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.7
A-10 この授業に満足している	3.6
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.7

## 結果 3.専門実技科目(レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)

【対象科目数: 44 アンケート実施科目数: 44】  
履修登録数: 1,995名 アンケート実施対象者数: 1,995名 回答者数: 1,629名  
回答率: 81.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.2
A-2 授業は理解しやすかった	4.2
A-3 教師の熱意を感じた	4.3
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.2
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.2
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.3
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.2
A-9 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.2
A-10 この授業に満足している	4.3

## 結果 4.専門講義科目(必修)

【対象科目数: 9 アンケート実施科目数: 9】  
履修登録数: 2,055名 アンケート実施対象者数: 2,055名 回答者数: 1,484名  
回答率: 72.2%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.7
A-2 授業は理解しやすかった	3.7
A-3 教師の熱意を感じた	3.8
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.8
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.8
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	3.9
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.8
A-10 この授業に満足している	3.7
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.7

## 結果 5.専門講義科目(選択)

【対象科目数: 29 アンケート実施科目数: 24】  
履修登録数: 2,960名 アンケート実施対象者数: 2,664名 回答者数: 1,678名  
回答率: 63.0%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.9
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	4.0
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.0
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.9
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	3.9

## 結果 6.実験、実習、演習科目(心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)

【対象科目数: 26 アンケート実施科目数: 26】  
履修登録数: 1,036名 アンケート実施対象者数: 985名 回答者数: 787名  
回答率: 79.9%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.1
A-2 授業は理解しやすかった	4.0
A-3 教師の熱意を感じた	4.1
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.1
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.2
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.3
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.2
A-10 この授業に満足している	4.1
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.1

## 結果 7.スポーツ科学演習・卒業研究論文

【対象科目数: 55 アンケート実施科目数: 39】  
履修登録数: 608名 アンケート実施対象者数: 420名 回答者数: 353名  
回答率: 84.0%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.4
A-2 授業は理解しやすかった	4.4
A-3 教師の熱意を感じた	4.5
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.5
A-5 板書や視聴覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.4
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.4
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.5
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.5
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.5
A-10 この授業に満足している	4.6
A-11 授業の目標に到達するに適した内容であった	4.5

## &lt; 参考 &gt;

評価(5段階)

全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	とても当てはまる
1	2	3	4	5

以上

平成28年度前期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

スポーツ科学部では平成28年度前期(7月)に授業アンケートを実施しました。  
 本学部の教員が行う全授業科目を対象に各質問項目の評価を集計し、授業形態別に平均値を出しました。結果は以下のとおりです。

なお、評価は5段階で行い、「共通質問項目」の平均を表記しています。

結果 1.生涯スポーツ演習 (スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 147 アンケート実施科目数: 141】  
 履修登録数: 4,286名 アンケート実施対象者数: 4,113名 回答者数: 3,518名  
 回答率: 85.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.5
A-2 授業は理解しやすかった	4.5
A-3 教師の熱意を感じた	4.8
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.8
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.6
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.8
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.4
A-9 授業の目標に到達するに達した内容であった	4.5
A-10 この授業に満足している	4.6

結果 2.生涯スポーツ論 (スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 13 アンケート実施科目数: 13】  
 履修登録数: 1,628名 アンケート実施対象者数: 1,628名 回答者数: 1,098名  
 回答率: 67.4%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.6
A-2 授業は理解しやすかった	3.7
A-3 教師の熱意を感じた	3.8
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.8
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.8
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.9
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.1
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	3.7
A-10 この授業に満足している	3.7
A-11 授業の目標に到達するに達した内容であった	3.8

結果 3.専門実技科目(レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)

【対象科目数: 72 アンケート実施科目数: 69】  
 履修登録数: 2,680名 アンケート実施対象者数: 2,552名 回答者数: 2,189名  
 回答率: 85.8%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.3
A-3 教師の熱意を感じた	4.4
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.3
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.3
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-9 授業の目標に到達するに達した内容であった	4.3
A-10 この授業に満足している	4.3

結果 4.専門講義科目(必修)

【対象科目数: 9 アンケート実施科目数: 8】  
 履修登録数: 1,515名 アンケート実施対象者数: 1,513名 回答者数: 1,104名  
 回答率: 73.0%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.8
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	4.0
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.0
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.1
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.0
A-10 この授業に満足している	3.9
A-11 授業の目標に到達するに達した内容であった	3.9

結果 5.専門講義科目(選択)

【対象科目数: 35 アンケート実施科目数: 32】  
 履修登録数: 4,300名 アンケート実施対象者数: 4,166名 回答者数: 2,774名  
 回答率: 66.6%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.0
A-2 授業は理解しやすかった	3.9
A-3 教師の熱意を感じた	4.1
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.1
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	4.0
A-11 授業の目標に到達するに達した内容であった	4.0

結果 6.実験、実習、演習科目(心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)

【対象科目数: 10 アンケート実施科目数: 10】  
 履修登録数: 904名 アンケート実施対象者数: 904名 回答者数: 718名  
 回答率: 79.4%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.0
A-2 授業は理解しやすかった	3.9
A-3 教師の熱意を感じた	4.1
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視覚機器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.1
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気や妨げる行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	4.0
A-11 授業の目標に到達するに達した内容であった	4.0

< 参 考 >

評価 (5段階)

全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	とても当てはまる
1	2	3	4	5



## 7 地域連携・社会貢献・広報推進

乾 真寛・小牟礼 育夫・野口 安忠

### ■ 地域連携

地域との連携において、近年スポーツ科学部は、極めて大きな役割を果たしてきていると言える。

エクステンションセンターが開講するキッズ・スポーツ講座は、年々その内容も充実しており、地域の子供たちにとってスポーツとの出会いの場や機会を提供してきた。また、社会人や高齢者の健康教室も関心が高く、女性のための元気体操教室やホノルルマラソンを完走しよう！など、サクセスフルエイジングにも大きく貢献している。

<キッズ・スポーツ教室> 受講生 7教室 計 351名

◇前期開催…キッズ体操教室 (50名)、キッズ・ラグビーフットボール (13名)、キッズサッカークラブ (113名)、キッズバレーボール教室 (39名)、キッズバスケットボール教室 (13名)

◇後期開催…キッズ体操教室 (37名)、キッズ陸上教室 (86名)

<一般・スポーツ教室> 受講生 5教室 計 213名

◇前期開催…女性のための元気体操教室 (47名)、ホノルルマラソンを完走しよう！Aコース (66名)、ホノルルマラソンを完走しよう！Bコース (39名)、ホノルルマラソンを完走しよう！ (7名)

◇後期開催…女性のための元気体操教室 (54名)

地域ネット推進センターの事業としては、福岡市との連携協定に基づく「アイランドシティにおける健康まちづくり」や「小学校の体育授業サポート事業」が高く評価され、福岡大学が有するオリジナルなノウハウが地域コミュニティや学校教育現場で活用され、大きな成果を収めつつある。

<授業サポート>

◇体育〈水泳〉授業支援…那珂小学校、東住吉小学校、春住小学校、舞鶴小学校、塩原小学校、飯原小学校、舞鶴小学校

◇体育〈レクリエーション〉授業支援…三筑小学校

◇体育〈縄跳び〉授業支援…室見小学校

◇体育〈サッカー〉授業支援…(横手小学校、那珂小学校、舞鶴小・中学校)

◇スノーケリング体験授業…小学校教諭向け講習会、舞鶴小・中学校、横手小学校、三筑小学校、塩原小学校、飯原小学校

◇新体力テスト支援…那珂小学校、東住吉小学校、春住小学校、舞鶴小・中学校、塩原小学校、飯原小学校

<事業企画・協力>

小学生向けサッカー教室、さぁ学ぼう！今日からはじまる健康づくり、九州・四国スカピオンカップフットサル大会、福岡大学招待中学生女子バレーボール大会、障害者スポーツフェスタ

2016、平成外環通りウォーキング大会、スロージョギング教室 in アイランドシティ、少年少女野球教室、福岡少年院のサッカー指導

## ■ 社会貢献

JICAと大学の連携協定に基づく南米ボリビアへの短期ボランティア派遣が2015年度より始動しており、今年度も多くの学生が参加した。グローバルな人材育成が叫ばれる中、スポーツ科学部生が国際社会で社会貢献する事業が実施されたことの意義や成果は、注目すべきことである。今年度は20名が志願した。その内訳はサッカー10名（男子8名、女子2名）野球10名（野球部7名、準硬式野球部3名）なお、サッカー10名のうち2名が2ヶ月派遣での合格となり、現地で活動した。

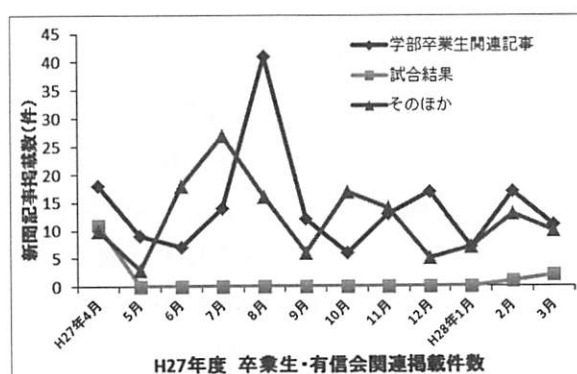
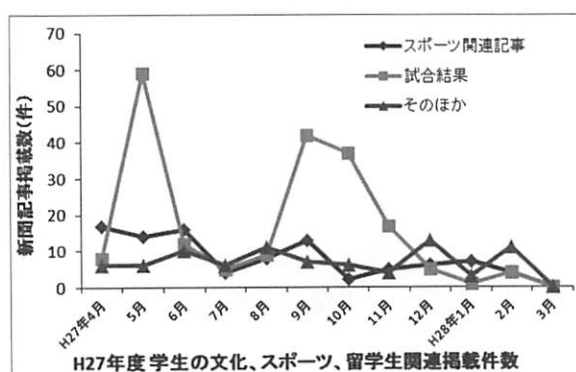
## ■ 広報推進

スポーツ科学部独自の情報発信を目指して、学部のホームページを中心とした学部行事の紹介やスポーツ大会における本学部生たちの活躍の速報を発信する試みが進められている。テレビ放映において、(KBCテレビおよび九州・山口の系列局 アサデス九州・山口「支援物資と義援金を熊本へ」、TBSテレビ Nスタ「田中宏暁教授のスロージョギング」などが放送された。全学ホームページでの文化・スポーツ関連記事の掲載回数（試合結果）や関心度（リオデジャネイロ五輪年度）が高いこともあり、今後、更なる広報体制の充実が必要であると考えられる（下表・図参照）。

全学ホームページ 2016年度ニュース記事より 主な本学部関連ニュース記事の抜粋（福岡大学広報課管理データより）

公開日	関連ニュース	ページビュー数*
2017/03/09	最新設備を整えた多機能スポーツ施設「福岡大学総合体育館」完成	5,788(49.6%)
2017/03/01	サッカー部8人のJリーグJFL入団が決定しました	3,077(70.4%)
2016/04/18	「熊本地震」被災者への救援物資 10tトラックに満載し、福岡大学を出発	1,829(39.6%)
2016/08/23	平成28年度九州六大学野球秋季リーグ戦日程	1,751(57.1%)

\*( )内スマートフォン閲覧率



平成28年度 新聞\*記事掲載件数推移（福岡大学広報課管理データより）

\* 取扱新聞社（西日本新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日経新聞、西日本スポーツ新聞、その他より）

## 8 国際交流、高大連携

乾 真寛・小牟礼 育夫

### ■ 国際交流

今年度も、競技系スポーツの国際交流と連携、健康運動に関する教育および研究分野での連携、学生間交流ならびに教職員との交流ができた。

#### 【スポーツ交流】

競技系スポーツにおいて、国際的な競技会への出場、トレーニング交流、指導者交流が行われた。また、今年度も学部独自の海外研修制度であるピークパフォーマンス演習Ⅱで7名（サッカー4名、バスケットボール1名、陸上競技1名、ハンドボール1名）の学生が海外で学んだ。

#### 【研究推進】

健康科学における運動生理学、スポーツ科学におけるコーチング学の分野をはじめ多くの分野で、国際的な共同研究、国際学会での発表、研究成果の国際学会誌掲載がなされた。

#### 【海外での学び】

スポーツ科学部で開講している授業、および個人面談等での情宣活動の結果、海外での学びに関係する授業履修者が増加した。（トップアスリートコーチ論・平成27年度33名→平成28年度62名、ピークパフォーマンス演習Ⅰ・平成27年度206名→平成28年度210名、ピークパフォーマンス演習Ⅱ・平成27年度9名→平成28年度13名）

また、国際センタープログラムで、海外研修生3名（グリフィス大学:オーストラリア）、交換留学1名（連邦立サンタ・カタリナ大学:ブラジル）の学生が海外で学んだ。さらに10名の学生がインターメディエイト・イングリッシュ GE クラスに登録し、海外での研修を希望している。

#### 【ボランティア派遣】

独立行政法人 国際協力機構（JICA）と連携し、スポーツ分野のボランティア（サッカー10名、野球10名）として、ボリビアに派遣した。

#### 【研究員派遣】

在外研究員として学部から小牟礼がカナダトロントで3ヶ月間研修を行い、NBA トロントラプターズ、トロント大学バスケットボールチーム等との繋がりを持つことができた。

次年度は、より多くの種目で、競技系スポーツの国際交流ができるよう進めていきたい。また、国外の大学や学部、研究機関との連携および共同研究を進めていくとともに、国際的な学会誌への掲載、発表、招待講演等を増やしていく。さらに、学内関係機関との連携を密にし、語学研修、海外研修、留学を情宣し、多くの学生が海外で学ぶ機会をつくとともに、留学生の受け入れを行いたい。また、ボランティアの海外派遣について JICA との連携を強め、より多くの学生が海外で活動する機会をつくるよう努力していきたい。

### ■ 高大連携

高大連携事業は、進学体育コースがある福岡大学附属若葉高等学校、スポーツコミュニケーションコースのある福岡県立早良高等学校と行われている。

#### 【福岡大学附属若葉高等学校】

進学体育コースの教員と定期的に打ち合わせを行い、連携事業について話し合ってきた。今年度は、第二記念堂を使用した体育祭の支援、ゴルフ授業への支援等を行った。また、若葉高等学校でのスポーツ科学部教員による出張講義、本学での模擬講義も行っている。さらに運動部活動レベルでの交流も盛んに行われている。

#### 【福岡県立早良高等学校】

担当教員の異動などにより具体的な活動は行われていないが、次年度以降、高等学校側の要望を受け止めながら、下記に示した活動をスポーツコミュニケーションコースの生徒を対象として行く計画である。

##### (1) 施設見学

本学スポーツ施設の見学及び実技授業の見学を行うことで、進学に向けたモチベーションの向上をねらう。

##### (2) 出張講義

本学学生による保健の授業提供と、コミュニケーション能力向上のためのレクリエーション授業の提供等を行っていく。

##### (3) 運動部活動における連携

高校内での部活動に対する本学学生の指導と本学部活動練習への高校生の参加。

## 9 教職課程教育

柿山 哲治

### ■ 教職課程登録者数 (2016 年度)

学部	学科	16 台	15 台	14 台	13 台	12 台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科	187	169	116	118	4	594
	健康運動科	60	46	37	43	1	187
合計		247	215	153	161	5	781

### ■ 社会教育主事課程科目登録者数 (2016 年度)

学部	学科	16 台	15 台	14 台	13 台	12 台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科			0	1	0	1
	健康運動科			0	2	0	2
合計				0	3	0	3

### ■ 教員免許状取得状況 (2016 年度)

学部	学科	卒業生	免許状取得者数	免許状取得率
スポーツ科	スポーツ科	215	104	48.4%
	健康運動科	75	37	49.3%
合計		290	141	48.6%

### ■ 教員免許状 (一種) 一括申請者数 (2016 年度)

学部	学科	申請者数	中一種	高一種	申請件数
			保健体育	保健体育	
スポーツ科	スポーツ科	104	92	104	196
	健康運動科	37	33	36	69
科目等履修生 (含大学院生)		2	2	2	4
合計		143	127	142	269

### ■ 教員免許状更新講座

実施日：2016 年 8 月 10 日 (水) 受講者：18 名

講座名：『現場で活かせる保健体育の指導法①』

担当者：「現代の子どものメンタルヘルスと運動・スポーツの役割」(山口幸生)

「バレーボール指導のあり方」(米沢利広)

■ 教員採用試験合格者数

6名（福岡県・福岡市W合格者を含む）

内訳：福岡県中学校2名、福岡市中学校1名、佐賀県中学校1名、鹿児島県中学校1名、美萩野女子高等学校1名

## 10 研究科教育活動状況

青柳 領・檜垣 靖樹

まず、スポーツ健康科学研究科博士課程後期では、古瀬裕次郎（課程博士、「高齢者における身体機能、認知機能及び脳容積に関する研究」）が学位審査の最終試験に合格し、博士の学位を取得した。指導の労を執られた檜垣靖樹教授に心より感謝申し上げたい。また、この最終審査には京都学園大学の木村みさか教授が加わった。ただ、昨年学位取得者が4名であることを考えると、一抹の寂しさを感じる。

前期課程では、8月に中間報告会、2月に修士論文発表会が開催され、最終的には6名が最終試験に合格した。その中で、呉屋良真が参加した教員の採点で最高点を獲得し、優秀発表賞を受賞し、研究科長より図書券の副賞が授与された。



釜山大学で行われた学術交流会の参加者の集合写真

国際交流に関しては、釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流会が会場を隔年ごとに持ち回ることにより行われている。本年度は釜山大学の Seonghok Hall で開催された。本学から青柳、柿山、布目、池永が参加し、学生は Mr. Chono, Mr. Kimura, Ms. Takae, and Mr. Kagimura が英語による研究発表を行った。釜山側からも Ms. Kim Tae Won, Ms. Ryu Ji-Su, Ms. Kim Yun-Kyung, Ms. Song Hyun-Kyung, Ms. Hyun-a Jung の4名が発表を行った。まだまだ、英語による発表および質疑応答は不十分な点が多かったが、この試みを踏み台に大学院生の国際学会での発表を拡大していく布石になってもらいたいと願っている。

発表会の後、釜山大学スポーツ科学研究科の研究室と研究科に付属する体育施設の見学があった。夜には、教員と学生に別れ、懇親会が開催され、質疑応答では不十分な点について議論が交わされた。

# 11 就職・進路

## (1) スポーツ科学部

柿本 真弓

平成 28 年度、本学に寄せられた求人は 6,737 件（前年度比 131 件増 2.0 ポイント増）、来学企業件数は、1,571 社（前年度比 109 社増 7.5 ポイント増）で、6 年連続の増加となった。求人件数を業種別でみると、最も多かったのが卸売・小売業（1,348 件 20.0%）で、次いで医療・福祉（1,078 件 16.0%）、製造業（954 件 14.2%）、建設業（714 件 10.6%）となっており、地域別でみると、福岡を含む九州圏内の求人が最も多く（2,456 件 36.4%）、関東地区に本社のある企業からの求人（2,220 件 33.0%）も多くあった。

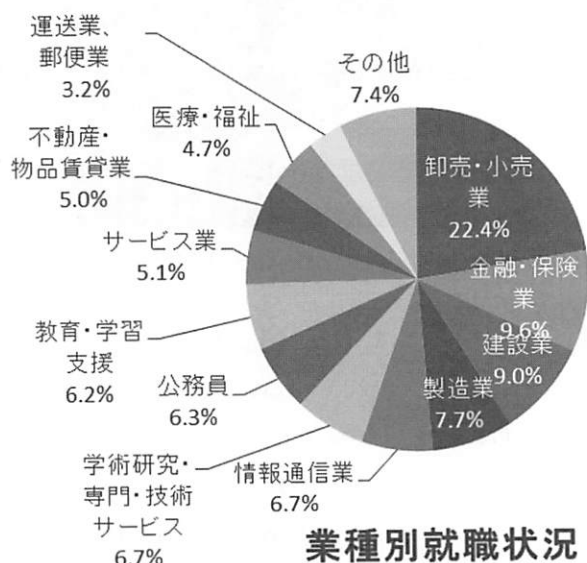
企業の広報活動・選考活動の開始時間は平成 27 年度と同様であったものの、採用活動の実情は毎年変化しており、活動のタイミングに苦慮する学生も見られたが、本学では、自己分析を円滑に進めるためのセミナーの開催、履歴書・エントリーシート添削指導、業界研究・企業研究の支援、OB・OG 訪問支援、模擬面接など集団・個人面接への対応、インターンシップの情報提供など、あらゆる角度から学生が有意義な就職活動を行えるよう支援している。このような支援や学生自らが活動した結果、就職率は 96.8% となり、前年度より 0.6 ポイント上昇した。

スポーツ科学部においては、全体的には 99.2%（男子 98.7%・女子 100.0%）であった。その内訳は、卸売業・小売業 22.4%、金融業・保険業 9.6%、建設業 9.0%、製造業 7.7%、情報通信業 6.7%、学術研究、専門・技術サービス業 6.7%、公務員 6.3%、教育、学習支援 6.2%、サービス業 5.1%、不動産、物品賃貸業 5.0%、医療、福祉 4.7%、運輸業、郵便業 3.2%、その他 7.3% であった。

主な就職先は以下のとおりであった。

(株) 九電工、セキスイハイム中四国(株)、積水ハウス(株)、悠悠ホーム(株)、(株) 伊藤園、大同特殊鋼(株)、日本食品(株)、NTT ビジネスソリューション(株)、(株) 日立ソリューションズ西日本、(株) マイナビ、九州旅客鉄道(株)、四国旅客鉄道(株)、スカイマーク(株)、ヤマト運輸(株)、アシックスジャパン(株)、アルファードコミュニケーションズ(株)、九州三菱自動車販売(株)、住友林業(株)、ダイキンエアテクノ(株)、トヨタカローラ山口(株)、パナ

ソニックコンシューマーマーケティング(株)、福岡トヨペット(株)、(株) 西日本シティ銀行、日本生命保険相互会社、(株) 福岡銀行、(株) 駅前不動産、(株) 電通九州、西日本技術開発(株)、日本食研ホールディングス(株)、アイ・ケイ・ケイ(株)、(株) サニクリーン九州、ハウステンボス(株)、(株) ジャクパ、(学) 福岡医療学院、日本赤十字社熊本赤十字病院、社会(医) 財団





白十字会、公益財団法人福岡県体育協会、総合警備保障（株）、TOTO メンテナンス（株）、石川県警、筑紫野大宰府消防組合消防本部、福岡県警、福岡市役所、鹿児島県教員（中学校）、佐賀県教員（中学校）、福岡県教員（中学校）、福岡市教員（中学校）など

<b>（２）スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻</b>
---------------------------------

檜垣 靖樹
-------

主な就職先は、福岡医療専門学校、福岡医療専門学校教員などであった。

また、卒業生のうち、福岡大学大学院博士課程後期（1名）、大阪大学大学院博士後期課程（1名）の計2名が進学した。

## 12 外部獲得資金実績

布目 寛幸

### 科学研究費 (H28 年度)

研究種目	代表者名	研究課題	金額
基盤研究(A)	田中 宏暁	健康寿命延伸と介護予防に寄与する運動プロトコルの開発とシステム構築	6,100,000
基盤研究(B)	川中 健太郎	骨格筋糖取り込みを高める栄養・運動処方に関する基礎研究 - ビタミンDに着目して -	6,200,000
基盤研究(B)	檜垣 靖樹	エピジェネティック修飾を介する骨格筋糖代謝の分子適応機構の解明	2,800,000
基盤研究(B)	今村 律子	アスリートの『観るチカラ』の不思議に迫る - 注視点揺動による視覚情報方略の解明 -	5,200,000
基盤研究(C)	下園 博信	ボールゲームプレーヤーの知覚・認知能力トレーニングの開発および検討	1,600,000
挑戦的萌芽研究	川中 健太郎	インスリンと運動が脳の血糖取り込みに及ぼす影響	1,400,000
挑戦的萌芽研究	檜垣 靖樹	骨格筋細胞における核とミトコンドリアの共遊走機構の解明	1,400,000
若手研究(B)	信岡 沙希重	短距離疾走速度と接地パラメータの関係とトレーナビリティ	1,800,000
若手研究(B)	羅 成圭	ビタミンDと運動が骨格筋ミトコンドリア新生ならびに品質管理機能に及ぼす影響	1,200,000
若手研究(B)	畑本 陽一	糖尿病・肥満予防に対する有効な運動タイミングの探索	2,300,000
研究活動スタート支援	栗田 昇平	体育授業における効果的な話し合い活動の在り方	1,000,000

### 受託研究 (H28 年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額
柳井市長	田中 宏暁	柳井市運動による健康づくり業務	1,512,000
福岡安全センター(株)	田中 宏暁	にこにこステップ運動にかかわる新規ノウハウの研究開発	800,000
中村学園大学	田中 宏暁	メタボリック症候群の個々人の心音に基づく運動アドバイスシートの開発	21,000
春日市立天神山小学校	山口 幸生	児童の体力と心理社会的要因の関連性	201,000
柳井市長	田中 宏暁	柳井市運動による健康づくり業務	1,512,000
福岡安全センター(株)	田中 宏暁	にこにこステップ運動にかかわる新規ノウハウの研究開発	800,000

### 研究助成寄付金 (H28 年度)

寄付者	研究代表者	研究課題	金額
サントリーウエルネス(株)健康科学研究所	田中 宏暁	運動と疾病予防に関する研究助成のため	2,000,000
(株)ケイ・エス・オー	田中 宏暁	チャンバーを用いた脂肪燃焼作用について	10,000,000
(株)モリタファインケミカル	田中 宏暁	研究助成のため	1,980,000
(株)アサヒコーポレーション	田中 宏暁	研究助成のため	500,000
住友ゴム工業(株)	布目 寛幸	ロングパイル人工芝のバイオメカニクス研究	500,000
第一三共(株)	上原 吉就	高血圧症における新規アンジオテンシンⅡ産生系の解明に関する研究助成	2,000,000

## 13 関連資料一覧

- ※ 福岡大学 大学案内
- ※ 福岡大学スポーツ科学部 学部案内
- ※ 福岡大学入試ガイド
- ※ 福岡大学要覧
  
- ※ 福岡大学スポーツ科学研究
  
- ※ 福岡大学研究推進部年報 2017
  
- ※ 教育開発支援機構年報（平成 28 年度）
  
- ※ ココロとカラダのウエルネスプログラム（Web 版）
  
- ※ 福岡大学スポーツ科学部卒業論文抄録集（平成 28 年度）
  
- ※ 教育実習報告書
- ※ 教職事前実習報告書
  
- ※ キャンプ実習、スケート実習、アクア実習、スキー実習報告書（平成 28 年度）
  
- ※ 大学生のスポーツと健康生活（大修館書店）

**福岡大学スポーツ科学部・大学院スポーツ健康科学研究科  
年報 第2号 平成28年度**

発行日 平成29年9月発行

編集者 学部年報編集委員会

田口晴康 森口哲史 今村律子

発行者 福岡大学スポーツ科学部

〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目19-1

TEL : 092-871-6631(代) FAX : 092-865-6029

印刷所 有限会社新幸印刷

〒830-0045 福岡県久留米市小頭町10-1-2F

TEL : 0942-38-0898

